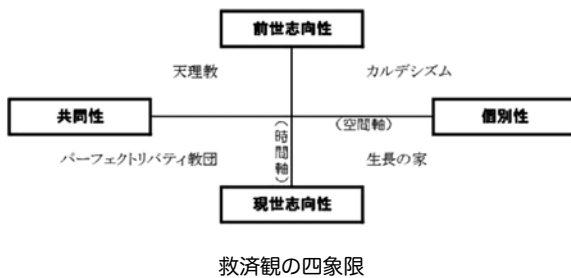


本連載は、ブラジル社会の形成プロセスとそこで展開する宗教を歴史的に眺めたうえで、日本人移民が移植した新宗教の展開とその受容をブラジル人の視点から論じてきた。まず、ブラジルの宗教風土を概説し（第1回から第16回）、天理教、生長の家、パーフェクトリパティ教団（以下、PL教団）の組織的展開について俯瞰的に説明した後（第17回から第30回）、各教団の受容のされ方を救済の多様性として紹介した（第31回から第45回）。議論が十分だったかといえば非常に心もとないが、今回で筆を擱くことにしたい。

そこで、今回は本連載で取り上げた日本の新宗教にカルデシズムを加え、これら四つの宗教にみられる救済観の類型化を試みることで、これまでの議論の総括に代えたいと思う。カルデシズムを加える理由は、第一に三つの新宗教に入信した人々のなかにカルデシズムとの教えや実践の連続性を指摘する人が必ずいること、第二に新宗教とカルデシズムはいずれも日本とブラジルの近代化プロセスで誕生、または移植され発展したという歴史を持っていること、そして第三に救済宗教という点で共通性があることが指摘できる。

島菌進は、救済宗教を「人間が悪や苦難を避けがたいものであることに思いを凝らしながら、それを克服する通常を越えた道があることを説く宗教」と定義し、「聖なるものの次元との関わりを重視し、また世界全体の包括的把握を提示するもの」と述べている（島菌 2010）。ここでは島菌の定義をもとにして各教団が時間と空間という次元において苦難を克服する道をどのように説いているのかに注目したい。



上図は、信者が救済を求める局面で、思いを巡らせるべき時間（前世または現世）と、行動すべき場（共または個）を、それぞれ縦軸と横軸に配置したものである。時間軸には前世志向性と現世志向性、空間軸には共同性と個別性という特性を挙げている。

まず、時間軸についてである。悪や苦難を克服する道は、いんねんを納消するところにあると説く天理教や、輪廻転生がもたらす前世の負債の支払いにあると教えるカルデシズムでは、救済を求める個人の意思を過去に向かわせる傾向がある。それは、自分の心遣いや通常は自覚できないはずの前世のありようを見直す（懺悔する）という思考法に見て取れる。このような教えの特徴を前世志向性と呼ぶことにする。一方、PL教団や生長の家では前世を反省するよりも、自分の振る舞いや認識を正して現世を切り開く自己の確立を促す。このような教えの特徴を現世志向性と呼ぶことにしたい。

なお、PL教団では「家の流れ」と呼ばれる「いんねん」に

似た教えがある。しかし、それも現世志向性に回収されることは前号で確認した通りである。また、生長の家の先祖供養は信者を前世指向に導くために行われるものではない。彼らの先祖供養は先祖の諸霊も「今・ここ」において「真相」が観入できるようにと祈りを捧げるからである。

次に空間軸についてである。生長の家は救済を獲得する一つの方法として神想観と呼ばれる瞑想を行い、教義本の学習が盛んに進められる。そのような個人的な信仰活動はニューエイジと共通する。また、カルデシズムでは個人の自由意志を尊重するため組織への帰属は強要されない。こうした私事化された宗教性を救済観の空間軸における個別性と呼ぶことにしたい。

カルデシズムでは前世の罪の償いのために慈善活動が推奨されており、本連載では「スープの日」の事例で考察した（Vol.15 No.8）。それは他者との関わりを推奨することから、信仰活動で信者の共同性を重視しているようにみえるかもしれない。しかし、彼らの救済観からすれば、スープの日の受益者が物質的のみならず宗教的に救済されるには受益者自身の努力が求められる。宗教的救済を得ることができるのはあくまでも「与える」側のみであることから、活動の宗教的意味付けは個人的なレベルに留まることがわかる。なお、「霊の進化」は個々のレベルに応じて自由に行われるもので、信仰を強制してはならないと考えられていることもすでに論じたとおりである。ここにも教えの個別性が見て取れる（Vol.15 No.6）。

空間軸の逆の象限には共同性を挙げるができる。天理教とPL教団の救済観がこれに相当する。いずれの教団も教会や地域での献身的な作業（ひのきしん、みささげ）が推奨され、積極的に人と関わるのが求められている。天理教では「人たすけたらわがみたすかる（「おふできき」三号47）」といい、PL教団では「自他を祝福せよ（PL処世訓11条）」と教えられている通りである。

以上、極めて図式的だが日本の新宗教とカルデシズムにおける救済観の分類を試みた。分類はあくまでも理念的で、実践の場では対抗的な特徴の折衷もあることを筆者は否定しない。これらの宗教が実際どのようにブラジルで受容されているのかはすでに紹介したとおりである。ブラジルの宗教風土は日本の新宗教をも取り込み、さらに新たな宗教運動を生みながら変容を続けている。

2013年5月から執筆を開始させていただいた本稿も今回で最終回を迎えました。この間、コメントを下さった読者の方々、また原稿を丁寧に読んでくださり、煩雑な編集作業を下さったおやさと研究所の皆様にご心から感謝いたします。どうもありがとうございました。

[参考文献]

島菌進「救済宗教論からの比較文明学」『比較文明学会会報』52号、2010年。